

TOP コレクション たのしむ、まなぶ イントゥ・ザ・ピクチャーズ

TOP Collection: Learning: Into the Pictures

2018年5月12日(土) - 8月5日(日)



どうぞ一緒に写真の中へ！

ロベール・ドアノー
《ピカソのパン》
1952年 ゼラチン・シルバー・プリント
©Atelier Robert Doisneau/Contact

展覧会概要

TOP コレクションは、東京都写真美術館の収蔵作品を紹介する展覧会です。今年のテーマは「たのしむ、まなぶ」。

「美術館」という場における学びは、学校や書物による学びとは異なる体験をもたらします。美術館の空間の空気感、壁に並ぶ作品のリズム感、実際の作品の大きさによる存在感などを全身で感じたりすることからの学びは美術館特有のものであります。また、ただ作品を時代の資料として見て情報を得るというだけではなく、自分の興味にそって作品の中に写っているものをじっくり見ることによって、それまで気づかなかった作品の別の一面に気づいたり、あるいは「わからないこと」を発見し、その「わからなさ」をたのしんだり、ということも美術館での「まなび」です。

本展は、当館の 34,000 点以上におよぶ膨大なコレクションの中から、古今・東西のすぐれた名品の数々を紹介しつつ、観客の皆様を美術館の豊かで多様な学びへと誘います。写真に詳しい方にも、そして当館を訪れるのは初めてという方にも新たな「たのしみ」と「まなび」がきっとあることでしょう。さあ、どうぞ一緒に写真の中へ！



エリオット・アーウィット
《ブラーツク、シベリア、ソ連》
1974年 ゼラチン・シルバー・プリント
©Elliott Erwitt / Magnum Photos ★



ギャリー・ウィノグラッド
《テキサス州、サン・マーコス、1964》
1964年 ゼラチン・シルバー・プリント

出品作品数

142 点

出品作家 (計 60 アーティスト) 順不同

NASA、W.ユーゲン・スミス、アンセル・アダムス、アンドレ・ケルテス、アンリ・カルティエ＝ブレッソン、ウィリアム・エグルストン、ウィリアム・クライン、エリオット・アーウィット、ギャリー・ウィノグラッド、コンスタンティン・ブランクーシ、ジェイコブ・リース、ジョージ・S・ジンベル、シンディ・シャーマン、ザ・サートリアリスト (スコット・シューマン)、ダイアン・アーバス、ダニー・ライオン、ダン・ワイナー、中平卓馬、新倉孝雄、ビル・ブランツ、ブラッサイ、ブルース・デイヴィッドソン、ベルント&ヒラ・ベッヒャー、ヘレン・レヴィット、ヘンリー・ピーチ・ロビンソン、ホンマタカシ、マイナー・ホワイト、リー・フリードランダー、ルイジ・ギッリ、ロバート・アダムス、ロバート・キャパ、ロバート・フランク、ロバート・メイプルソープ、ロベール・ドアノー、井上孝治、稲越功一、鬼海弘雄、橋口譲二、桑原甲子雄、荒木経惟、高梨豊、三木淳、小畑雄嗣、植田正治、森山大道、石元泰博、沢田教一、中山岩太、中村征夫、長野重一、田沼武能、土門拳、奈良原一高、北井一夫、北島敬三、本橋成一、名取洋之助、木村伊兵衛、林忠彦、鈴木理策

本展の見どころ

珠玉の名作がズラリ！

国内・海外の名作がそろそろ東京都写真美術館コレクション。その数は3万4000点を超え、世界でも希少な写真・映像のコレクションとして知られています。本展は2016年秋のリニューアル・オープン以来、初めて国内外の代表的なコレクションを数多くご紹介するコレクション展です。親しまれている名作から、著名作家の代表作まで、惜しみなくズラリと展示。個展とはひと味違った贅沢なセレクションをお楽しみください。

<東京都写真美術館の写真コレクションについて>

当館では、「写真作品（オリジナル・プリント）を中心に、写真文化を理解する上で必要なものを、幅広く収集する」ことを基本方針に、1989（平成元）年より作品の収集をおこなっています。写真史において重要な国内外の作家・作品を幅広く、体系的に収集するとともに、日本の代表的作家も重点的に収集しています。写真通史を網羅する膨大な当館コレクションは、世界の美術館でも数多く展示されています。



アンリ・カルティエ＝ブレッソン 《ニューヨーク、アメリカ》 1937年 ゼラチン・シルバー・プリント
©Henri Cartier-Bresson / Magnum Photos ★



思わず“話したくなる”作品

教育普及を専門とする学芸員が企画した本展には、“思わず誰かと話したくなるような”作品が多数展示されます。作品のなかに写っているものや状況が不思議だったり、作家や被写体の気持ちを想像したり、写っていないものまで見えてくるような、考えを次々に巡らせて話したくなる作品ばかりです。本展は、名作展の決定版でありながら、ふだんは解説パネルなどの情報をチェックして見終えてしまいがちな作品を、自由なアプローチでの鑑賞へといざなう空間がひろがっています。テーマ、モチーフ、作家などにつながりや違いを感じながら、じっくりと作品の世界に入っていきます。

木村伊兵衛 《大阪・中之島公園》 1955年 ゼラチン・シルバー・プリント

大学や企業も注目！「美術鑑賞」

ひとつの作品をじっくりと見て、どんどん考えを深めていくこと。そして、ほかの人の考えに耳を傾けて、新しい見方を共有すること。いま大学や企業はこのような美術鑑賞に注目し、大学入試や企業研修にも取り入れています。本展では、鑑賞の案内となる『じっくり見てみるガイドブック』（日英）もご用意（5月下旬より）。対話型の写真鑑賞をリードします。

イベントを多数開催

会期中には、関連ワークショップやイベントを多数開催します。手話付きのギャラリートークや、障害の有無にかかわらずさまざまな人がいっしょに鑑賞するワークショップもあります。「鑑賞」と「制作」が同時に楽しめるワークショップができるのも、当館ならではの特徴です。おとなも子どももそして多様な背景の人々も、だれもが参加できる関連プログラムで「たのしむ、まなぶ」を体感してください。



鈴木理策 《海と山のあいだ》より 2005年 発色現像方式印刷

展示構成

1. まなざし
2. よりそい
3. ある場面
4. 会話が聞こえる、音が聞こえる
5. けはい
6. むこうとこちら
7. うかびあげるもの



マイナー・ホワイト
《納屋2棟、ダンスヴィル、ニューヨーク州》
1955年 ゼラチン・シルバー・プリント

関連事業

担当学芸員によるギャラリートーク

会期中の第1・第3金曜日 16:00より担当学芸員によるギャラリートークを行います。
本展チケット（当日消印）をご持参のうえ、3階展示室入口にお集まりください。

手話通訳つきギャラリートーク

2018年6月1日(金)、7月6日(金)、8月3日(金)の16:00～
第1金曜日は上記「担当学芸員によるギャラリートーク」を手話通訳つきで行います。

じっくり見たり、つくったりしよう！

2018年7月28日(土) 10:30～12:30 / 7月29日(日) 10:30～12:30

写真にまつわる制作を体験したり、展示室で作品について楽しく話し合ったり、一度にさまざまな体験ができるプログラムです。 *作品解説ではありません。

対象：小学生とその保護者（2人1組） 定員：各日10組 事前申込制、先着順

参加費：800円（別途本展観覧チケットが必要です）

※申込方法など詳細はホームページでお知らせします。

視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ

2018年6月3日(日) 10:30~12:30 / 6月24日(日) 10:30~12:30

障害の有無にかかわらず、多様な背景を持つ人が集まり、言葉を交わしながら一緒に美術を鑑賞するワークショップです。

対象：どなたでもご参加いただけます。 定員：各日7名 事前申込制

参加費：500円（別途本展観覧チケットが必要です）

※申込方法など詳細はホームページでお知らせします。

クロマキーランド

2018年7月7日(土) 14:00~17:00

「クロマキー合成」によって、実際にそこにはないユニークな記念写真を撮影します。

予約不要 どなたでもご参加いただけます。

対話型作品鑑賞会

2018年5月31日(木) 18:30~ / 6月28日(木) 18:30~ / 7月26日(木) 18:30~

参加者で対話を交えながら作品を鑑賞します。*作品解説ではありません。

本展チケット（当日消印）をご持参のうえ、3階展示室入口にお集まりください。

「たのしむ、もらう」TOPスタンプラリー

本展、「TOPコレクション 夢のかけら」展（8月1日~11月4日開催）、映像展「マジック・ランタン 光と影の映像史」展（8月14日~10月14日開催）の3展をご覧いただくと、もれなくオリジナルグッズがもらえるスタンプラリーを開催します。

※詳細は当館ホームページをごらんください。

次回予告

「TOPコレクション たのしむ、まなぶ 夢のかけら」展

開催期間 2018年8月11日(土・祝)~11月4日(日)

展覧会図録

『TOPコレクション たのしむ、まなぶ』

本展および次回「夢のかけら」展の2期を含むTOPコレクション展より、代表的な出品作品を掲載（「イントゥ・ザ・ピクチャーズ」展より64点、「夢のかけら」展より65点）

テキスト 佐伯胖（さえきゆたか 田園調布学園大学大学院教授、東京大学・青山学院大学 名誉教授）

武内厚子（当館学芸員）、石田哲朗（当館学芸員）

編集・発行 東京都写真美術館 1,620円（税込）



1F カフェ メゾン・イチ「ピカソのパン」販売！

出品作品の ロベール・ドアノー 《ピカソのパン》をイメージした
焼き立てパンを販売中！ご鑑賞の思い出に、ぜひどうぞ。

1個 538円（税込） ※8月5日（日）まで限定販売

開催概要

主催 東京都 東京都写真美術館

協賛 凸版印刷株式会社

会場 東京都写真美術館 3階展示室

東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

Tel 03-3280-0099 URL <http://topmuseum.jp>

開館時間 10:00～18:00（木・金は 20:00 まで）入館は閉館 30 分前まで

休館日 毎週月曜日 ただし、7月16日（月・祝）は開館、7月17日（火）は休館

観覧料 一般 500（400）円／学生 400（320）円／中高生・65歳以上 250（200）円

※（ ）は 20 名以上団体、小学生以下および都内在住・在学の中学生、障害手帳をお持ちの方とその介護者は無料、第3水曜日は 65 歳以上無料 ※7月19日（木）～8月3日（金）の木・金 18:00-21:00 は学生・中高生無料／一般・65 歳以上は団体料金*各種割引の併用はできません。

このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版をデータにてご用意しております。

掲載をご希望の際は、下記広報担当までご連絡ください。

掲載点数が1点の場合は、展覧会メインイメージとして、本リリース表紙にあります

ロベール・ドアノー 《ピカソのパン》 1952 年 ゼラチン・シルバー・プリント 東京都写真美術館蔵
©Atelier Robert Doisneau/Contact

のご掲載をお勧めいたします。

なお、★のついた作品（©Elliott Erwitt / Magnum Photos および©Henri Cartier-Bresson / Magnum Photos の2点）は名刺サイズ程度でご掲載ください。大きなサイズでご掲載の場合は、別途使用料がかかりますので、下記広報担当者までお問い合わせください。

図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いします。
また、図版のトリミングや文字掛け等の加工はできません。

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 東京都写真美術館

Tel 03-3280-0034 Fax 03-3280-0033 <http://topmuseum.jp>

展覧会担当 武内厚子 a.takeuchi@topmuseum.jp

広報担当 久代明子 平澤綾乃 前原貴子 press-info@topmuseum.jp

資料) 展示解説パネル

イントゥ・ザ・ピクチャーズ — 写真の中へ

美術館に来ると、いつも作品を見る前にまずキャプションや解説を読み、作品にまつわる情報を先に得てからその作品自体を鑑賞する、という方は多いのではないのでしょうか。また最近では、作品を見てほどなくして、カメラやスマートフォンなどで写真を撮り、次の作品に移動する、という方もいらっしゃるのではないでしょうか。

さて、みなさんは普段、美術館の展示室で、1点の作品をどのくらいの時間をかけて鑑賞しますか？たとえば、一つの作品を、キャプションや解説の情報を得てから見る場合、作品を通して、ひとつひとつの情報を「確認する」という鑑賞方法になりがちで、チェックが完了すると同時に鑑賞も終わってしまうのではないのでしょうか。

では、全く情報をもたない子供たちがグループで、画面に見えていることをもとに対話をしながら一つの作品を鑑賞するとどうでしょうか。ある小学校の子供たちがロベール・ドアノーの《ピカソのパン》（作品番号1）を鑑賞したときの様子をご紹介します。

まず、テーブルに置かれたパンが手のように見えるというところから写真の中に入ります。そして、人物の額が光っていることに気づき、光の当たっている方向について考え、人物の見ている方向に窓があるのではないかと想像します。また、テーブルの上の物に着目した子供は、食器が二人分あることから、写真に写らない人物の存在に気づきます。また、人物の背後に目を向けた子供は、棚にあるバスケットから、この家には女性がいると想像し、さらに棚の一部や左側の壁が不自然なほど真っ黒で何も見えないことに気づき、これは白黒写真だから真っ黒に見えるが、カラー写真なら黒くないのかもしれないという答えを導き出します。

「だとしたら、男の人の服のしましまも黒じゃないかもしれない」、「この写真の中のいろいろなものは本当は何色なんだろう？白黒にしたときに黒く写るということは……」。このような話をしながら、さまざまな写真の特性に気づき、撮影した人物の存在や、撮影された場の様子、被写体の状況まで考えます。子供たちは、一点の作品に少なくとも10分以上の時間をかけ、情報を「確認する」方法の何倍もの注意力で、作品画面の隅々やその外側までじっくりと鑑賞し、解説に記されていない出来事を発見したりして、「写真の中」をたのしむのです。

本展は、見る人が能動的・主体的に作品と関わり鑑賞し、作品をたのしむことを体験していただくとするものです。

ぜひみなさんも、当館の古今東西の名品を前に、想像力を働かせながら作品をじっくり見つめ、意見を交わしながら鑑賞を深め、作品をたのしんでみてください。きっとすてきな発見があるはずです。

どうぞ、一緒に、写真の中へ！

1. まなざし

作品の中の人物のまなざしに注目してみましょう。

まなざしには、その人物の意志や気持ち、思いが表れます。

何を見つめているのでしょうか？どんな気持ちなのでしょう？

また、まなざしのゆくえについて思いをめぐらせていくと、画面の中の世界が、どんな場所で、どんな状況なのかが見えてきたり、作品には写っていない、画面の外の部分のことまでわかってくることがあります。

それぞれの作品の中の人物のまなざしを入口に、写真の中の世界へはいつてみましょう。

2. よりそい

作品の中の人物は、どんな人なのでしょう？

どんなものが好きで、どんな仕事をしている人なのでしょう。

そして写真にとらえられた瞬間は、何をしているところで、どんな気持ちでいるのでしょうか？

まなざしだけではなく、表情や服装や動作、ときにはうしろ姿から、人物の感情を想像したり、作品の画面の中の様々な要素をつなぎ合わせ、人物の気持ちや状況によりそいながら、作品を見てみましょう。

3. ある場面

写真におさめられたとある一瞬。様々なものがたりが見えてきます。

それぞれどんな場面でしょう？そこでは何が起きているのでしょうか？

その作品の中の人々は、なぜそのような様子で、なぜそこにいて、何をみていて、何をしているのでしょうか？

人物の様子、複数の人物の関係性、全体に漂う空気などをじっくり見て、思いめぐらせてみてください。

どうしてこんな状況になったのか、そしてこの後どうなるのか、そう考えながらじっくりと画面を見ていくと、なぜ作家がこの場面でシャッターを切ったのかがわかってくるかもしれません。

4. 会話が聞こえる、音が聞こえる

写真には画面しかありませんが、作品によっては見ていると音が聞こえてきそうなものがあります。

見ているものから、目を通して脳裏で、知らず知らずのうちに、話し声や笑い声、雑踏の音など、なにか音が鳴っているような感覚。

ここにある作品からは、いったいどんな音が聞こえるのでしょうか？

また、どんな会話をしているのでしょうか？それは大声？それとも小さなささやき声でしょうか？

想像のなかで聞こえる音を感じながら、そこに写し出される状況をじっくり見てみましょう。

5. けはい

物や風景のまわりのけはいやものがたりに目を向けると、どんなものが見えてくるでしょう。

履き古した靴や、誰かが置いていった上着。いったいその持ち主はどんな人なのでしょう？

また、食事を終えたあとの片付けられていないテーブルは、そこにいたはずの人々のけはいを感じさせます。そして部屋の様子、窓の外の風景、窓に反射する室内の様子などから、その場の情景が見えてきます。

さらに、雄大な山々と川の流れる風景からこの後どんなことが起こるかを考えたり、クリスマスツリーの飾られた室内の風景からその家に暮らす人々の生活を想像したりすることもできます。

こうしてある場所のある瞬間を切り取った写真から、その前後の時間の経過を見たり、画面にはいないけれども、そこにいたはずの人々について思いをめぐらせていくと、作家が何をとらえようとしたのかの手がかりが見つかるかも知れません。

6. むこうとこちら

カメラの前に広がる世界とそのうしろの世界、写真に写っている世界とさらにそのむこうにある世界、写真を見ている私のいる世界と写真を通してしか見る事のできない別の世界。作品の画面を通して、様々なむこうとこちらがつながっています。

それぞれの作品のむこうとこちらを見比べたり、未知のむこうがわの様子を想像したりして、写真の中の様子を読み取ってみてください。

普段は、カメラのうしろの世界は写真の中には入らないものですが、時々、それが画面に写り込んでいることがあります。それによって、私たちは画面の中に、よりたくさんのものである事ができたり、時には作家の姿を見ることがもできます。普段は写す側の作家が、写る側になることもあります。写っているときもいないときも、写真の中の世界には実は必ず作家が介在していて、むこうとこちらを繋いでいます。

作家の存在に意識を向けてみると、また違ったものが見えてくるかもしれません。

7. うかびあがるもの

美術館では、壁に展示された複数の作品を同時に見ることができ、その間で想像や考えをさらに広げることができます。同じシリーズの複数の作品を同時に見ていると、写真の中からそこには写っていない何かがかうかびあがってきます。

中平卓馬の〈日常〉は、一見、何の関係もないようなものをとらえた2枚の写真が、隣り合って並ぶことで2つの間になにか不思議な関係性がうかびあがります。それぞれ隣り合った写真には、いったいどんな関係性があるのでしょうか？じっくり見るといろいろな共通点や関係性が見えてきます。

ルイジ・ギッリの〈モランディのアトリエ〉は、画家・モランディのアトリエを撮影したシリーズです。部屋に置かれたモチーフや画材、印象の違ういくつかの部屋の様子、空間に配置された家具や道具など、様々な距離感で切り取られた複数の写真を一度に見ることで、モランディの人柄や生活の様子などがうかびあがってきます。モランディはどんな人でどんな絵を描いている人だと思いませんか？そしてどんな生活を送っているのでしょうか？

ホンマタカシの《Tokyo and My Daughter》は、少女のポートレートと東京の風景のシリーズです。作家と少女は親子ではないのですが、まるで親子の写真、家族写真のように見えます。それぞれの写真には、単に少女のポートレートというだけではなく、家族写真に特有のエッセンスがちりばめられています。いったいその特徴はどんなところにあるのでしょうか？